

# 茅ヶ崎の昔話と心性の表象について

須藤 格<sup>(\*)</sup>

## はじめに

昨今、「民話」という言葉をメディアで多く耳にする。また、どこどこ民話といった書物も多く刊行されている。「民話」は、昔話や伝説・世間話も含んでいる非常に幅の広い言葉である。

そもそも言葉は、話し言葉と書き言葉に大きく分ける事ができる。民俗学では、話し言葉の世界にも独自の文学的な表現や文学が存在する事を認め、これを言語芸術や口承伝承とよんでいる。ここでいう口承伝承とは、耳で聞き、口で伝えられてきた昔話や、世間話、伝説といったものを含んでいる。基本的に口伝で伝承された説話をさす。

口承伝承による昔話は、様々な分野からのアプローチが可能である。これについて、ヨーロッパ民間伝承文学研究者であるマックス・リュティは「民俗学は昔話を文化史的・精神的ドキュメントとして研究し、社会におけるその役割を観察する。心理学はその物語を心的過程の表出として考え、聞き手あるいは読者への影響をたずねる。文芸学は昔話をして昔話足らしめているものを確認しようとつとめる<sup>1)</sup>」と述べ、民俗学、心理学、文芸学の立場の相違を簡潔に明らかにしている。

今回、これまでさまざまな文献に記録されている茅ヶ崎の口承伝承の中から昔話を抽出し、分類・整理した。そして昔話を、地域の人々の心性が表象文化と捉え、それが生まれ定着した空間との関係性について考察を試みた。

## 1 昔話とその調査・研究

### (1) 昔話の特徴

昔話の特徴は、「話す」のではなく「語る」ことにある。一定のリズムと語り方があるのが特徴である。もう一つは、「むかし、むかし、あるところに…」といった定型句で始まり、途中の文末

が「…したとき」といった伝聞調で、一つの話が完結すると「めでたし、めでたし」といった定型句が添えられることである。

これは、昔話の語り手が、昔話を現実とはかけ離れた幻想に近いおとぎ話として認識していることを示しているといえる。最初の定型句「むかし、むかし、あるところに…」によって、現実世界とはかけ離れた世界の話であることを示し、文末の定型句によって架空の世界が終わり、現実の世界に戻る機能を果たしている。また、文末が伝聞の形をとっていることも、その物語の語り手個人とは関係のないことを示しており、その内容が架空であることを示している。昔話は伝説と異なり、特定の場所と時間に結びつかない点が特徴である。どの地域に置き換えても差し障りがなく、自由で広い伝播力をもつ。全国各地に同じような話が幾つもある理由の一つでるといえる。

これに対し伝説は、伝承されている土地の遺物や遺跡、土地、建物、人物などと関わりがあり、土地との密着性が強く、内容も短い。語り手はその内容を信じており、具体的で信用度が高いものと捉えるため、その地域に長く記憶されていることが多い。

## (2) 県下における調査・研究

次に、県下と当市における調査・研究の歩みについて概観したい。

県下における民俗調査は、大正7(1918)年8月に津久井郡内郷村(現相模原市)をフィールドに行われた。その調査に現地側関係者として民俗学者である鈴木重光が参加し、『相州内郷村話』が『炉辺叢書』<sup>ii)</sup>の一つとして刊行された。これが県下における昔話採集の最初の記録である。戦後、相模民俗学会が結成され、機関誌『民俗』が刊行された。その誌上や県教育委員会刊行物、清野久

男著の『江ノ島民俗誌』をはじめ、各地区の郷土史などに少数ずつ昔話が散見される。まとまったものとしては、安池正雄の『神奈川の民話』が昭和 34(1934)年に刊行されている。公的なものとしては、県教育委員会から『神奈川昔話集』<sup>iii</sup>が刊行され、断片的なものも含め丹念に昔話の破片といえるものまでも採集し、整理・掲載している。

神奈川県は、全国と比較した場合、昔話が乏しいところとされており、前掲書の編者である小島瓊礼もその中で「神奈川県においては、昔話を新しく採集するということは、かなり困難な状態になっているが、まったく絶望的というわけではない」と述べている。しかしながら、それは適当なときに調査がなされなかったため、たまたま記録が残っていないというだけで、必ずしも乏しい地域ではないと考える。実際、県内の他市町村においての昔話に関する調査研究を市町村史でみる限り、絶望的というよりも、少ないながらも確かに昔話が存在したことを認めることができる。

傾向として、県央には比較的濃厚に記録が残っており、それよりも南の平野部は少ないことが確認できる。特に、鎌倉市から平塚市にかけての湘南地域では、戦後ベッドタウン化による開発が行われ、村の解体、田畑の住宅化が余儀なくされる中、実生活に必要な無形の文化から消失していったと考えられる。

当市においても、戦後におけるベッドタウン化による前述のような変化が例外なくおきており、その中で記録される前に消失してしまった可能性が高い。そのような状況下で、郷土史家や市民ボランティアグループといった先人が行った調査の記録が残されており、それらを基に『資料館叢書 6 茅ヶ崎の伝説』<sup>iv</sup>や『茅ヶ崎市史 3 考古・民俗編』<sup>v</sup>に口承伝承がまとめられている。当市も近隣市町村と同じく、昔話の記録が豊富な地域とは言い難い。まして都市化が進んだ現在となつては、過去の聞き取り調査によって収集されることも、不可能に近い。先人の研究者たちの調査研究によって残された記録を頼りに、茅ヶ崎の昔話を考察し、昔話を語り、聞き、伝えてきた人々の

心性を、表層文化論の観点から眺めてみることで、文化的素養を汲み取ることを試みたが、作業は極めて困難であり、考察が断片的であることを寛容されたい。

## 2 昔話の分類

### (1) 分類による昔話研究について

昔話は、佐々木喜善が最初の分類を試みた。しかし、佐々木の行った 5 種類の説話群の分類は、まだ確固とした概念規定がなされずに、客観的基準とはなりえなかった。昭和 9 (1934)年に柳田國男が明らかにした「昔話の分類について」(「旅と伝説」<sup>vi</sup>)が、その実質的な始まりである。柳田は、その独自の見解を体系づけ、『日本昔話名彙』<sup>vii</sup>にまとめた。日本の昔話を完形昔話、派生昔話に大きく分類・整理した(表 1)。

|      |                                                                              |
|------|------------------------------------------------------------------------------|
| 完形昔話 | 誕生と奇瑞・不思議な成長・<br>幸福なる婚姻・母子の話・<br>兄弟の優劣・財宝発見・<br>厄難克服・動物の援助・<br>ことばの力・知恵のはたらき |
| 派生昔話 | 因縁話・化物話・笑話・<br>鳥獣草木譚・その他                                                     |

表 1 昔話の分類(柳田國男)

これによると、柳田の「完形昔話」は、人の一生の物語を意図していると考えられる。物語の主人公は、いずれも背の低い小<sup>ちい</sup>さ<sup>こ</sup>子として異常かつ不思議な出生と成長を遂げて、いくつかの厄難に遭遇し、やがて幸福な婚姻にいたる。これを基本的な人の一生の完結と見なし「完形昔話」とした。そして、ほかはすべてこれからの派生であるとした。

一方、関敬吾は国際的視野から、昔話の分類・整理を行い、昔話の比較研究を目的にして『日本昔話集成』<sup>viii</sup>、『日本昔話大成』<sup>ix</sup>をまとめた。関は日本の昔話資料を整理し、西欧の資料に直接照応し得るように図った。そこに導入された三分類である①動物昔話、②本格昔話、③笑話は、今日広くに用いられている。

|      |                                                                                     |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 動物昔話 | 動物葛藤・動物分配・動物競争・<br>動物餅競争・猿蟹合戦・勝々山・<br>古屋の漏・動物社会・小鳥前生・<br>動物由来                       |
| 本格昔話 | 婚姻—異類簪・異類女房・難題簪、<br>誕生・運命と致富・呪宝譚・兄弟譚・<br>隣の爺・大歳の客・継子譚・異郷・<br>動物報恩・逃鼠講・愚かな動物・<br>人と狐 |
| 笑話   | 愚人譚・誇張譚・巧智譚                                                                         |

表2 昔話の分類（関敬吾）

柳田国男の分類は「完形昔話」を主として、それ以外を派生とし、「派生昔話」に二次的な物理的時間の経過をみていると捉えることができる。

これに対する関敬吾の分類は、「動物昔話」「本格昔話」「笑話」の三つの昔話群を並存するものとして位置づけている。そして、それらの三つの昔話間に、いっさい時間的な差異や優劣をもたないとしている点において、柳田の分類と大きく異にしている。関のいう「本格昔話」は柳田の分類する「完形昔話」に相当するものであり、それは人の一生を物語る「メルヘン（*Marchen*）」と認識される。しかし、関が分類した「本格昔話」には、人の一生を物語るゆえに「笑話」より古いとする保証は全くなく、両者同等の理解の上になっていると考えられる。

## （2）昔話と神話について

今日広く用いられる「民話」の語は、英語圏でいう *Folk tale* すなわち「民間説話」の略称である。ドイツ語圏ではこれを「*Volks Marchen*（フォルクスメルヘン）」といい、中国では「民間故事」としている。関敬吾は、いわゆるメルヘンに古態を想定していない。その代りに、かつてしきりにいわれた神話・伝説・昔話・世間話の新旧を問い、いずれが一段と古く、より由緒あるものにするという考え方に再検討を求めた。

神話を最上位に置き、その零落したものを伝説

とし、昔話はさらにそれに遅れをとるもの、そして笑話や世間話は、最も落剥した存在といった認識がなされていた。しかし、それらの画一的な評価と見解に再考を迫る関敬吾の理論は、大きな意味をもったといえる。神話が、そこにいわれるごとく「神々の物語」であるとしたならば、それに対する昔話は「常民の物語」である。その意味で、神話と昔話の概念は、対立した両極端に位置するものと位置づけた。つまり、「常民の物語」を考えることは、それを伝承していた人々のことを考えることになる。

## 3 茅ヶ崎の昔話

茅ヶ崎市で記録されている口承伝承から伝説と世間話を除き、昔話を、時間的な差異や優劣をもたない関の分類を基に整理・分類した（表3）。一番多く記録されているのが「十二支の由来」を解くもので、次いで「親棄山」、「勝勝山」、「猫の踊り場」、「河童報恩譚」と続く。

### （1）伝説化した昔話

前述したように、昔話と伝説は根源を別にするものだが、伝承過程において伝説化がみられる場合がある。当市においては「河童報恩譚」である「河童徳利」の話がそうである。現在は所在が分からなくなっているが、主人公となった農民の子孫の家には河童にもらった徳利が実際に保存されていた<sup>※</sup>。「河童徳利」は、難を救われた河童が礼にくれたものが、酌んでもつきない酒徳利であった、という話であるが、他の地方では秘薬の処方の仕方（茨城県牛久市、同県玉造町、等）であったり、魚を毎朝持ってきたり（岐阜県中津川市、同県飛騨市、等）といった類型がみられる。

### （2）昔話化した伝説

伝説が伝承過程で昔話化するには、時間を要すると考えられている。理由として、伝説は木・石・地名などの現実に存在する事実を裏付けに発生し伝承されているものなので、伝承者はそれを信じており、形は単純で、話も短く、文芸的要素に乏しく、時として史実と混同されている。

|    | 話名         | 日本昔話大成      | 地域  | 話者 | 生年  |
|----|------------|-------------|-----|----|-----|
| 1  | 十二支のはなし    | 12 十二支の由来   | 下寺尾 | 女  | M29 |
| 2  | 十二支のはなし    | 12 十二支の由来   | 堤   | 男  | M31 |
| 3  | 十二支のはなし    | 12 十二支の由来   | 菱沼  | 女  | M38 |
| 4  | カチカチ山      | 32C 勝勝山     | 下寺尾 | 男  | M40 |
| 5  | ムルがこわい     | 33A 古屋の漏    | 下寺尾 | 女  | M29 |
| 6  | 動物昔話 犬の足   | 63 犬の脚      | 堤   | 男  | M31 |
| 7  | 猿沢の池       | 103 猿       | 芹沢  | 女  | M35 |
| 8  | 蟹満寺        | 104B 蟹報恩    | 芹沢  | 女  | M35 |
| 9  | お蚕さま       | 108B 蚕由来    | 下寺尾 | 女  | M29 |
| 10 | 猫の踊り場      | 255 猫の踊り    | 下寺尾 | 女  | M29 |
| 11 | 猫の踊り場      | 255 猫の踊り    | 下寺尾 | 男  | M37 |
| 12 | 物いう魚       | 本格新39A 物言う魚 | 下寺尾 | 女  | M31 |
| 13 | 物いう魚       |             | *   |    |     |
| 14 | うば捨て       | 523A 親棄山    | 下寺尾 | 女  | M29 |
| 15 | うば捨て       | 523A 親棄山    | 下寺尾 | 男  | M40 |
| 16 | 本格昔話 継子いじめ |             | 芹沢  | 女  | M31 |
| 17 | 継子いじめ      | 205B 米埋糠埋   | 下寺尾 | 男  | M37 |
| 18 | 五月節句としょうぶ  | 244 食わず女房   | 下寺尾 | 男  | M37 |
| 19 | 五月節句としょうぶ  | 101A 蛇簀入    | 下寺尾 | 女  | M35 |
| 20 | 五月節句としょうぶ  | 101A 蛇簀入    | *   |    |     |

- 1 地域は、話者の居住地。  
2 生年は話者の生まれで、Mは明治を示す。  
3 \*は話者の居住地、生年、性別不明のものを示す。

表3 茅ヶ崎の昔話の分類

その代表的なものが、弘法大師に関するものである。地域的広さ、話数の多さから、一人の人間が一生涯に成せるものではない。当市では、4例の記録が確認できる。

その他の伝説化した昔話、昔話化した伝説と考えられるものを下記にまとめた（表4）。

|         |                           |
|---------|---------------------------|
| 伝説化した昔話 | 河童徳利、やせ地蔵、車地蔵             |
| 昔話化した伝説 | 千ノ川のおせん、何時橋、小栗判官と照手姫、弘法大師 |

表4 伝説化した昔話と昔話化した伝説

#### 4 表象文化としての昔話

心理学者であり昔話の研究者であるフォン・フランツは、「昔話は海であり、伝説や神話はその上の波のようなものである」<sup>x1</sup>と表現している。

昔話を、これまで行った民俗学的分類に加え、深層心理学の観点を踏まえた表象文化として考察することで、茅ヶ崎にいらした人々の心性について考えてみたい。

#### (1) 深層心理学の見地からみた昔話

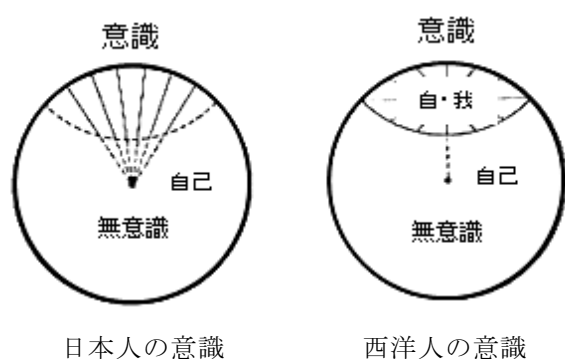
昔話のモチーフが離れた地域においても共通のものを見出せることは、伝播による説明がまず考えられる。これに加え、伝播によらずに自然発生的に類似の話が異なる場所に生じることがあると深層心理学では考える。その理由として、人間が自我意識を持っており、世界の中に、自分の位置というものを確認し、ゆるぎないものとするための「知」の一つが「昔話」としている。空間と自身という全体性を構築もしくは回復する過程において、昔話を源泉とする場合が考えられる。その代表例と言えるのが全国に分布する「桃太郎」の話である。

桃から子どもが生まれてくることは、事実として承認し得ないものであるが、人間の自我形成過程において、自分がどこからきたのか、ということを経験よりもそれを越えたXからきたとする方が、確かな存在感を持つ。英雄誕生にまつわる昔話が全国的に存在感を持つ昔話として、類型を変えつつも多く存在しているのは、人間の自己の存

在の位置付け過程における無意識が関係していることが推察できる。

日本の昔話は、伝説に近いと指摘されており、日本の昔話と海外のものを比較研究し、その特徴を探った小沢俊夫の『日本人と民話』<sup>xii</sup>において、「日本の場合には民話を現実と離れた、純粋なおとぎ話の世界として考えにくくて、現実の世界とおとぎの世界との境目が溶けちゃっている<sup>xiii</sup>」と述べている。日本人の心性における意識と無意識の境目の不鮮明さを指し示していると考えられる。このことは、日本人の意識構造について述べることで補足したい。

日本人の意識は図のように、意識と無意識の境目が鮮明ではなく、意識も中心としての自我によって統合されてはいない。対照的に、西洋人の場合、意識が無意識と明確に区別され、その中心に確立した自我が形成されていると考えられている。



しばし、日本人は主体性のなさや無責任だと批判されることがあるが、日本人はむしろ、心の全体としての自己の存在に西洋人よりはよく気付いており、その意識は無意識内の一点、自己への形態へと収斂されていると考えられる。つまり、意識と無意識の境目も不鮮明なままで、漠然とした全体性を志向している。現実と非現実が交錯し、「おとぎの国」が容易に「この世」と結合する。これは、伝説の昔話化や昔話の伝説化による合理化が多く行われてきた一因でもあり、話形が形式的なところからも推察することができる。

境界を不鮮明にして全体性を希求する態度は、

日本人の昔話における自然観にも示されている。色彩や四季折々の変化、いろいろな動植物の一切が風景として語られ、それが語り手の観念にあることがあげられる。筆者が、フランス人の友人の息子に「浦島太郎」の話をした時、彼は竜宮城の色彩的な描写には全く興味を示さず、別のことを期待しているようだった。彼にそのことを尋ねると、「浦島太郎がいつ竜宮城の竜と戦うのか。」と筆者は聞かれた。

このエピソードから考えられるのは、自然との一体感に重きを置いてきた国民性と、対象との戦いに重点を置く国民性という差が存在していることである。確立した自我意識にとって自然とは、戦い克服していく対象であることが感じられた。

日本の昔話において、「悲劇」や「死」は、当たり前前のモチーフである。前述のエピソードを踏まえて考えると、自然と一体で暮らしていた日本人にとって、「死」やそれにまつわる「悲劇」は案外親しみやすく、生活に溶け込み、自然という全体性へと還るといふ死生観の表れと捉えることもできる。

また、「幸福なる結婚」を大きな最終的な問題としている昔話や伝説が西洋に多いのに対し、日本の昔話においてそれを大きな命題としては絶対数からすると多くはない。この解答として考えられることは、明確に確立した自我は、世界との統合性を得るために結合すること＝「結婚」を必要とするが、漠然とした全体性に生きる日本人にとって、それは大した問題でないことが考えられる。

## (2) 昔話の伝承における幻想と心性

以上のことを念頭に置いて考えると、日本の昔話も世間話も、そして伝説すらも概念の外縁が不明確であることに気付かされる。

ある個人の夢や実体験を通じた「幻想」が、何らかの普遍性を持つとき、人々の間に語りつがれるものとして定着すると考えられる。それが、昔話の起源の一つとしてあげられる。特に、その地域において昔話が普遍性をもつのは、その「幻想」

と地域の文化、地勢、自然環境、その時代との間に強い関係性が認められるときであると考ええる。つまり、昔話にはその定着時の地域が内包していた共通の要素を多くもっていると考えられる。

茅ヶ崎市において、昔話の記録が少ない理由の一つに、地勢に起因する自然環境が影響していると考えられる。他の地方の昔話の伝承が、寝かしつけのための寝物語や、囲炉裏端で語られていたというものは少なく、ニワ（土間）で作業をしながら話してくれた、雨の日の針仕事をする祖母から聞いた、夜なべの縄ないをやりながらなど、何かしらの手仕事をしながら聞いたという記録が散見される。また、家族以外では、学校の先生や近所の友人や老人、といった寒冷的な地方とは異なった伝承環境がみられる。話し手、聞き手がじっくり落ち着いて、といった情景ではないことが想像できる。湘南地域特有の温暖な気候に恵まれ、何かしら仕事をしていることができ、囲炉裏そばの傍にいれば我慢できないような日は、寒冷的な地方に比べ少なく、じっくり昔話を聞かせてやろう、聞いてみようという「伝承の場」がなかったため、話数、文芸的表現、伝承性に乏しい理由の一つとして考えることができる。

続いて、当市で確認されている昔話の中から、「猫の踊り場」「継子話」「食わず女房」「蛇へび罨入」を対象に考えてみたい。

### ① 「猫の踊り場」から

茅ヶ崎市だけでなく、藤沢市、平塚市、大磯町などの湘南地域だけでなく横浜市でも確認されるほど、県下で多く記録されている昔話に「猫の踊り場」がある。

「踊場」という地名は戸塚にある。かつては追いはぎが出るような場所であったが、宿場の戸塚から長後への要路であったため、必然的に人が通過した。この話は、「家の猫が踊っている」「夜の食事に熱いお粥をもらって笛が吹けない（もしくは、歌が歌えない）」というところが共通している。この類型は戸塚から、湘南にかけて特有のものであり、この昔話の伝承を支えた湘南地域共

通の何かがあったと考えることができる。それが「伝承の場」ということになる。

一つの仮説として、稲作を生業として人々の、秋に行く夜の杵すりと考えられる。茅ヶ崎や藤沢では、稲の刈り入れ、稲こきは秋の末頃に終わり、天気の良い日を見定め、2〜3日杵を干す。陽のあるうちに土間に取り入れ、夜のうちにカラウスにかけていた。この作業は、杵が冷えてしまうと杵殻が取りにくくなるため、夜遅くまで続けられた。この時、夜食を食べる習慣があり、お粥やオジヤであることが多かった。作業に忙しい働き盛りの男女に夜食を作るのは老人であり、幼い子どもたちと接触する数少ない一夜ではなかったのではないだろうか。忙しく働く大人たちを土間から見ながら、子どもたちに老人が熱いオジヤをもらった猫の話をしたことが想像に難くない。

### ② 「ままこ継子話」から

継子話である「こめうめぬかうめ米埋糠埋」の話も採集数は少ないが、確認されている。これは、脱穀に使う唐箕が関係していることが考えられる。唐箕は米と杵殻とが別になって下にたまる民具であり、米を手ですくってみたり、杵殻の中に手を入れてみたりして、米の方が冷えていて杵糠の方は暖かいのを実体験として記憶している方が感じたことに、「継子がたすかり、実の子が死んだというのもほんとのことだと思った。」という聞き取りも残されている。このことから、農村での実態を基盤に、昔話の授受が可能となっていたことが推察できる。

### ③ 異類との結婚

日本全国に記録があり、細かな差異はあるものの類型も多く記録されているのが、なかなか結婚しない男のところにやってくる「ものを食べない女」が「蛇」であるという「食わず女房」の話である。端午の節句の際に、菖蒲を茅葺き屋根の軒先部分にさす慣習のもととなっている。

この話では、男性の女性に対する理想像と実際

の女房という、理想と現実の乖離を受け入れられない心性が垣間見られる。

上記とは逆のパターンで、夜な夜な女のところにやってくる男が蛇という「蛇簪入」がある。

茅ヶ崎においても、蛇が菖蒲を使って、自分のところにやってこられないようにする話が1例、女が蛇との間に身ごもった子を菖蒲で堕胎する話が1例記録されている。

この話からは、二つのことが考えられる。一つは、「素性の分からない男との結婚」である。結婚後に相手の男の素性が分かり、例えば暴力を振るうということが起きた場合、「思っていた相手と違う」「相手は蛇のようだ」「離れたい」と感じることは、現代に生きる我々にも想像に難くない。そして相手の男との間に身ごもった子どもの妊娠中絶という行動につながる部分や、遠ざかりたいという思いは非常に現実性が高く、迫真性があり、婚姻における普遍的な問題性を含んでいる。

二つ目として、神話からの派生が考えられる。『古事記』の崇神天皇の項目の中の「三輪の大物主」という話がある。

話の概要を簡単に述べる。容姿端麗なイクタマヨリビメ（活玉依毘売）のもとにとっても立派な男がやってくる。イクタマヨリビメは、その男の子を身ごもる。素性を知るため針と糸を裾につけておいたところ、男が大物主であることがわかる。大物主は戸穴を通ったりと、蛇を連想させる行動をとっている。柳田国男はこの点について、「蛇簪入」の蛇婿は最初神様として全国に伝播したが、神話的な神聖な考え方が時代の変遷とともに衰退し、生活感や現実感が話の中で拡大していったのではないかと指摘している。

他の観点としては、この昔話を部内婚、部外婚の表象したものと捉えることもできる。自分たちと異なった慣習をもつ部外者との婚姻による価値の相違である。また、男性側の女性性の受け入れ、女性側の男性性の受け入れの表象として捉えることもできる。他にも、蛇の他に鶴や猫、狐といった動物でこの異類との婚姻は多くの類型が存在する。分布範囲の広さ、類型の広さから、こ

の昔話が地域性を超越した日本人の心性を表象している文化であると考えられる。

## さいごに

本稿では、昔話の調査・研究の歩みを確認し、茅ヶ崎市域において伝承されてきた昔話を対象に、人々が内包している心性がいかにより表象しているのかについて考察を試みた。

表象文化論からのアプローチは、複雑なテキストの分析と多くの時間を要する。また、深層心理学からの考察は、研究者の主体の在り方が問題となり、その知見を利用した推考は困難なものであるが、敢えて試みた。断定的な表現がなされている点については、あくまでも筆者の見解であることを寛容されたい。今回、数例の昔話を対象として考察を行い、地域の心性を僅かながら見出すことができたが、他市町村の事例との比較研究、時代背景、地理的な追究といった課題を残してしまった。これに関しては、今後の研究を期待したい。

先人の調査・研究があったからこそ、本稿は取り組むことができた。市内を踏査し、記録保存に努めた先人の研究者や市民による地道な調査・研究に心から敬意を表する。

\* 茅ヶ崎市教育委員会生涯学習課  
茅ヶ崎市文化資料館

---

## 注

- i マックス・リュティ, 小沢俊夫訳「ヨーロッパの昔話 - その形式と本質」岩崎美術社, 1969
- ii 郷土研究社, 大正 12 (1924) 年。本稿では、昭和 46 (1971) 年、相模湖町教育委員会より刊行されたものを参考とした。
- iii 上下巻構成。神奈川県教育委員会, 1967・1968
- iv 「資料館叢書 6 茅ヶ崎の伝説」茅ヶ崎市教育委員会, 1981
- v 「茅ヶ崎市史 3 考古・民俗編」茅ヶ崎市教育委員会, 1980
- vi 「定本柳田國男集 6」筑摩書房, 1962
- vii 柳田國男, 1948
- viii 関敬吾編, 1959
- ix 関敬吾編, 1979
- x 現在は所在不明。文化資料館に写真による記録が残されている。
- xi von Franz, *ibid.*
- xii 小沢俊夫「日本人と民話」ぎょうせい, 1976
- xiii 前掲書
- xiv 河合隼雄「昔話と日本人の心」岩波新書, 1982
- xiv 柳田國男「日本昔話名彙」日本放送出版協会, 1948

## 参考文献

- 鶴嶺小学校「茅ヶ崎町鶴嶺 郷土誌」茅ヶ崎市教育委員会, 1976
- 山口金次「茅ヶ崎歴史見てある記」茅ヶ崎市教育委員会, 1978
- 香川の歩み編集委員会「香川の歩み」香川自治会, 1978
- 茅ヶ崎市文化資料館編「資料館叢書 5 柳島郷土誌」茅ヶ崎市教育委員会, 1979
- 「茅ヶ崎市文化財資料集 第九集」茅ヶ崎市教育委員会, 1983
- 南湖郷土史編集委員会・茅ヶ崎市文化資料館編「資料館叢書 11 南湖郷土誌」茅ヶ崎市教育委員会, 1995
- あしかび郷土史研究グループ「田の字の家」茅ヶ崎市教育委員会, 1994
- あしかび郷土史研究グループ「としよりの話」, 2000

---

小島瓊礼「全國昔話資料集成 35 武相昔話集」

岩崎美術社, 1981

「平塚市史 12」平塚市, 1994

「藤沢市史 第七巻」藤沢市, 1980

「寒川町史 別編 12 民俗」寒川町, 1991

「神奈川県史 各論 5 民俗」神奈川県, 1977

「昔話と文学」(『定本柳田國男集』6)

筑摩書房, 1962

関敬吾「昔話の歴史」至文堂, 1966

安池正雄「神奈川の民話」(日本の民話 (19))

未来社, 2006

國學院大學日本文化研究所「神道事典」

弘文堂, 1999